

Title	がん罹患後のbenefit findingと患者支援に関する研究
Author(s)	古村, 和恵
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/59332">https://hdl.handle.net/11094/59332</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	古村和恵
博士の専攻分野の名称	博士(人間科学)
学位記番号	第25300号
学位授与年月日	平成24年3月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学位論文名	がん罹患後の benefit finding と患者支援に関する研究
論文審査委員	(主査) 教授 佐藤 眞一 (副査) 教授 金澤 忠博 准教授 権藤 恭之

### 論文内容の要旨

2006年に「がん対策基本法」が成立して以降、わが国のがん患者支援をとり巻く状況は大きく変化している。がん患者の生活の質の維持向上が課題となり、医療・心理・社会の視点を含めた総合的な支援サービスが求められている。このような中で、今後必要になる患者支援の方法を模索し、その方法を臨床場面に応用していくことは重要である。

本研究では、がん患者が示す「肯定的な人生の変化」に着目する。がん治療という困難でストレスフルな経験をした患者の中には、がんに罹患する以前よりも後の方が、人生がより肯定的に変化したと感じている者が存在する(Linley & Joseph, 2004)。このような現象は、健康心理学においてbenefit findingという概念を用いて研究されている。これは、ストレスフルな経験をする以前には意味を見いだせなかった出来事を、その経験による「恩恵」として捉えることを意味する概念である。欧米では、グループ療法や筆記療法を用いたbenefit findingの促進が、健康増進の手段として注目されている(eg. Guastella & Dadds, 2008)。しかしながら、日本ではまだbenefit findingに関する研究が少ないため、基礎的な研究が必要である。また、日本における患者支援としての応用の可能性についても議論する必要がある。

そこで、本研究はがん患者が経験しているbenefit findingの内容を調べ、そこから得られた知見をもとに、患者が闘病生活における肯定的な変化を感じながら、前向きに治療を続けていくための支援について議論し、その支援方法を提案することを目的とする。

#### 研究1「がん罹患後のbenefit findingに関する研究」

本研究では、英国人および日本人がん患者のbenefit findingの経験に関する質的調査を行った。結果、英国人がん患者の経験からは、人生の新たなチャンスの獲得、精神的・道徳的成長、時間の貴重さの認識、人生に対するゆとりと内省、生きることへの感謝、家族や友人との関係性の向上、他の患者への共感、健康に関する知識の取得、健康的な生活変化、という恩恵の内容が示された。また、日本人がん患者の経験からは、時間の貴重さの認識、生きることへの感謝、精神的成長、人生に対するゆとりと内省、ポジティブな考え方の維持、周囲への気遣い、前向きな治療への取り組み、生きがいの明確化、家族や友人との関係性の向上、他の患者への共感、健康に関する知識の取得、健康的な生活変化、という恩恵の内容が示された。

英国と日本という2ヶ国のがん患者が経験したbenefit findingの内容には、重複する部分を示された。つまり、異なった文化圏で生活するがん患者が、がん罹患というストレスフルな経験から共通の恩恵を感じ取っている可能性が示唆されたということになる。しかしながら、日本人は英国人のようにストレスフルな経験による肯定的

な変化としてbenefit findingを解釈しているのではなく、ストレスフルな経験というつらい状況の中でも肯定的な価値観や考えを持つことを「がんの恩恵」として感じている可能性があり、その場合、英国と日本でbenefit findingの内容に共通性はあるが、その捉え方が異なると考えられた。

Benefit findingの捉え方が欧米とは異なる可能性がある日本では、benefit findingそのものを促進する欧米型の支援は、患者に理解されにくい可能性があると考えられた。よって、より日本人ががん患者に合う支援として、彼らが大切にしている価値観として示された「楽観的に考えること」、「周囲に迷惑をかけないこと」、「仕事をもち続けること」を損なわずに治療を続けていくための支援が必要であると考えられた。

## 研究2「がん患者支援ツールに関する研究」

本研究では、がん患者のための情報共有ツール「わたしのカルテ」の制作・運用およびその有用性の評価を行った。結果、がん患者は「わたしのカルテ」を使用することにより、医療者・家族・患者同士のコミュニケーションが増加するという経験をしていた。特に、患者と医療者の情報共有が円滑になることで、患者は病気や治療に関する理解を深めたり、話題にしづらい終末期に関する話し合いを行ったりするという利点が示された。一方で、「わたしのカルテ」を運用する際のバリアとして、医療者から患者への「わたしのカルテ」の使用の意義に関する説明不足と医療者の理解不足、患者の治療の意思決定に対する消極的な態度、プライバシーの心配、記入の面倒さ、その他のツールの利用などが示された。これらの結果から、「わたしのカルテ」はその運用のためには医療者側の積極的な介入が不可欠であるものの、適切な運用が可能となれば、患者と医療者間の情報共有を促進することでお互いの関係性を改善し、がん患者が治療に向き合っていくための支援として有用であると考えられた。

## 総合論議

総合論議では、がん患者が人生を肯定的に捉え、「がんの恩恵」を感じながら治療を続けていくための支援として、「わたしのカルテ」が有用であるかどうかを検討した。そのために、研究1で示された、がん患者の価値観を振り返り、「わたしのカルテ」が臨床場面においてそれらの価値観を支える支援となり得るかを議論した。

1点目として、がん患者の多くが「プラス思考で前向きに進んでいる」や、「くよくよせずに前向きに進んでいる」など、がんになっても前向きであることを大切にしている可能性が示された。このような患者の価値観は、治療の選択・意思決定のための重要な判断基準となるため、医療者も理解しておくべきであるが、臨床場面では非常に見えにくい部分であり、医療者の多くが理解していない。そこで、患者がどのような価値観を持って治療に向き合っているのかを、医療者がきちんと把握できるような支援が必要である。「わたしのカルテ」を使用することで、患者は治療を受ける際の希望や意見を整理することができ、医療者に伝えやすくなる。また、医療者も患者の希望や意見が整理されたノートを見ることで、患者の考えを把握しやすくなることが期待される。

2点目として、患者にとって、苦しい中でも「周囲に迷惑をかけないこと」が重要であり、迷惑をかけることが精神的苦痛となる可能性が示唆された。よって、患者が周囲の人々に対して抱えている負担感を軽減するための支援が必要であると考えられる。「わたしのカルテ」を使用することで、患者と医療者は前もって急変時の対処法について話し合っておくことができる。その対処法を家族に伝えておくことで、患者は少なくとも急に家族に負担をかけてしまうことを回避できるため、家族にかかる心理的・身体的負担を減少させることができ、患者の負担感を軽減に繋がること期待される。

3点目として、がんになっても「仕事をもち続けること」が患者にとって生きがいであり、大きな意味を持つ可能性が示唆された。多くの患者が、がんになることで仕事を辞めざるを得ない状況があり、その解決のためには何らかの社会政策が必要である。そのような中、「わたしのカルテ」は補助的な支援として、患者と医療者が治療と仕事の両立の可能性について話し合うことを促進すると考えられる。そして、患者の希望にできるだけ添った治療の選択に繋がることが期待される。

「わたしのカルテ」は、1) 医療者が患者の希望や意見を理解した上で、患者と一緒に治療を進めるための支援、2) 患者の周囲の人々への負担感を軽減するための支援、3) 患者の仕事に関する希望を支えるための補助的支援、として有用であると考えられる。このような支援は、がん患者が大切にしている価値観を損なわずに治療について話し合うことに役立ち、患者が人生を肯定的に捉え、「がんの恩恵」を感じながら治療を続けるための支援の一助になると考えられる。よって本研究は、このような支援ツールを用いた患者と医療者間の情報共有の強化を

支持し、臨床場面における使用を提案する。

今後の課題として、研究者と医療者の双方が協力し、患者にも医療者にも受け入れられやすい支援体制を構築することが必要である。がん患者が日々の暮らしを肯定的に捉え、苦痛や不安の少ない治療生活を送るための支援を提案することが、今後にも必要になると考えられる。

## 論文審査の結果の要旨

がんは、早期発見による治癒率の向上や治療技術の発展に伴って、必ずしも死に直結する病ではなくなっている。しかしながら、がんを告知された患者の悲嘆と絶望感は強く、常に死を意識した生活にならざるを得ない。また、たとえ治療が功を奏したとしても、再発の危険に怯え続けなければならない。その意味で、がんは依然として人々の恐怖心をかきたてる病といえる。

そのようながん患者の中にも、罹患後に人生に対する態度が肯定的に変化した人々の存在が指摘されている。がんに限らず、このような自己の力の及ばない重篤な疾病や障害をもった人々の中には、その疾病や障害をもったからこそ得られた体験の一部を、「恩恵」あるいは「恩寵」と捉えているとする研究が、健康心理学の分野で報告されている。そして、この現象をbenefit findingとして概念化し、それを促進することによって、ストレスが低減することも知られており、新たな研究・実践分野として注目されている。

本研究は、がん罹患後のbenefit findingに対するがん患者の語りを英国と日本で比較した上で、我が国のがん患者のbenefit findingを治療に活かすための支援ツール「わたしのカルテ」を作成し、その効果を検討したものである。

研究1では、英国人と日本人のがんを告知された患者のbenefit findingについて個別面接による質的調査を行った。その結果、英国人ががん患者からは、人生の新たなチャンスの獲得、精神的・道徳的成長、時間の貴重さの認識等の恩恵の内容が示された。また、日本人がん患者のからは、時間の貴重さの認識、生きることへの感謝、精神的成長等の内容が示された。語りの量では、圧倒的に英国人ががん患者の方が多かったものの、その内容には共通点も多く、異なった文化圏で生活するがん患者が、がん罹患という経験から共通の恩恵を感じ取っている可能性が示唆された。しかしながら、日本人は英国人のようにストレスフルな経験の肯定的な変化としてbenefit findingを解釈しているのではなく、つらい状況の中でも肯定的な価値観や考えを持つことの必要性を感じており、英国と日本でbenefit findingの捉え方が異なると考えられた。

研究2では、研究1の結果を踏まえて、がん患者の治療にbenefit findingを活かすための支援ツール「私のカルテ」を作成・運用し、その効果を評価した。その結果、患者と医療者の情報共有が円滑になることで、患者は病気や治療に関する理解を深め、終末期に関する話し合いさえ行うことができるという利点が示され、その有用性が予想された。

本研究は、卒業論文・修士論文で行ったがん患者に対する量的研究では捉えられなかった微細な心の変化を、質的研究によってそのより深い内容を読み取ろうとした研究であると同時に、英国人と日本人の語りという異なる言語による内面の表出を比較検討した点でも意義があると評価できる。さらには、「こころのカルテ」を作成・運用することで、benefit findingを促進する試みも行っている。そもそもがん患者にがん罹患した恩恵を尋ねること自体が困難な研究であることを鑑みるに、本研究の価値は極めて高いものと思料する。以上より、本論文は博士（人間科学）の学位授与に値すると判定された。